

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 杉山友実子姉

開 会 招 詞 イザヤ40章28-31節

* 賛 美 歌 2:1 (ソングシート)

1. 主のみいつとみさかえとを こえのかぎりたたえて、またき愛とひくきころ

御座(みざ)にそなえひれふす。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人

のものをむさぼってはならない。

(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 2:3

3. 闇をかえてひかりとなす なぐさめぬしとうとし。のぞみは湧き、おそれは消え、み民のさちつきせじ。アーメン

公 同 の 祈 禱 7 キリストの二性一人格

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありながら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しか

も罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本质をとって身ごもられた。

そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。

(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 外国教会関係委 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 イザヤ50章4-9節 (旧約聖書1145頁)

フィリピ1章19-26節 (新約聖書362頁)

説教・祈祷 「誇りをもって生きる」杉山昌樹牧師

* 賛美歌 39:1-2

1. わが身の望みは ただ主にかかれり、主イエスの外には 依るべき方なし。

(おりがえし) わが君イエスこそ 救いの岩なれ、救いの岩なれ。

2. 風いと激しく 波立つ闇夜も、みもとに礎を おろして安らわん。(おりがえし) アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあげさせたまえ

御国を来たせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 67

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、ああみさかえよ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

子供祝福式

報 告 門脇陽子長老 (司会・受付 次週：雨宮信長老)

本日 受付 1階：大日南隆夫・大日南信也執事 2階：藤井牧子執事 /ZOOMホスト・録音：森川莞太

次週 受付 1階：佐藤紀子・古澤迪子執事 2階：大日南信也執事 /ZOOMホスト・録音：大日南悠

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

フィリピ1：18-26 「誇りをもって生きる」

説教題の変更

すでにお気づきの方もありませんが、今日の説教題は変更しています。先週予告しましたものは「迷わない生き方」でした。けれども、今日の聖書の23節を見ますとパウロ自身が、板挟みだ、と書いていますから、「迷わない」はやはりちょっと違うかな、と思わされたということがあります。ただし、この場合のパウロの「板挟み」は、決して困った状況の板挟みではありません。むしろ、どっちを選んでも大丈夫、そんな嬉しい板挟みです。そして、おそらくパウロは、この嬉しい板挟みへと、フィリピ教会の人たちを招き入れようとしているのです。この所はまだ手紙の書き出し部分なのですが、もう、本題に入り始めているのです。フィリピ書を読みますと、だんだん明らかになるのですけれども、フィリピの教会にもまた、外からの悪い影響や、教会自体にもいくらか問題があったようです。けれども、その個別の問題をどうこうする、というより以前に、キリスト者としてのあり方をまずはしっかりと確認しようというのが、この手紙の書き方で、それはすぐにこの後2章で互いを配慮しあう、その模範はイエス様ご自身だ、という勧めが語られるのですけれども、そのさらにもう一步手前、そもそも、キリスト者として生きていく場合の最も基本的な事柄、それをここでは、パウロ自身の生き方として語り始めるのです。

最初と終わり

それで最初に目を留めたいのは、この個所の始めと終わりの言葉です。今回選んだ19節にはこんな言葉があります。「私の救い」パウロが救われている、という事実です。キリスト者として当たり前の言葉のようにも聞こえます。しかし、それは、まだ完成していないとも言えます。例えば2章ではパウロは「私はすでにそれを得たわけではない」（2：12）とはっきり言います。自分の救いはまだ完成していない、そしてその救いは、キリストの霊の助けと、そして、あなた方の祈り、すなわち、フィリピの教会の人たちの祈りにかかっている、とこういうのです。この点もまた大切なことで、パウロの中では、救いというのは、自分で何とかするもの、神様と自分の関係だけで済むものではないのです。そうではなくて、みんなで一緒に成長していく中で、この世においては完全には完成しないけれども、ちょっとずつ完成に近づいていく、それもお互いに祈り合い、教え合う中で、そのような完成に向かっている、こういうイメージです。それは私たちの教会でもそのまま当てはまります。私たちは、お互いに祈り合う中でこそ、信仰に生きていくことができるのです。そのようにして、私たちはこの地上の生涯を共にしていくのですが、そのような成長を導く言葉が、今日の個所の最後にあります「キリスト・イエスに結ばれているというあなた方の誇り」です。人間の誇りというのは、信仰生活において時に邪魔なものになりかねませんが、この場合には「キリスト・イエスに結ばれている」、「誇り」です。イエス様と一緒に生きているという特別な誇りがある、というのです。そして、そのような誇りある堂々とした生き方について、一步先を行くパウロの生き方が、このところで示されていて、みんなこっちの側で生きようと招いている、その招待状がこの手紙なのです。

パウロの生き方

そこで早速このところで描かているパウロの生き方について見て行きたいのです。それをもっとも端的に表しているのは、21節の「私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです」という言葉でしょう。けれども、この言葉は、かなり広い意味を持っているようにも思えます。何しろ生活全般キリストだ、と言っているからです。さらに、「死ぬことは利益だ」というような言葉は、それだけ取り出しますと、ちょっと怖い言葉になりかねません。このように、意味がはっきりしない言葉と出会った時には、ちょっと回り道をしまして、〇〇は何々ではない、という考え方をしますと、意味がはっきりしてくることがあります。そこで、まずは「死ぬことは利益だ」という言葉について、この「利益」は、死そのものから来るのではない、というように考えてみたいのです。例えば、23節後半はこうなっています。「この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい」。ここでもまた、パウロは、死ぬことを「望ましい」と、まるで死を求めているように言いますが、しかし、そこで彼が死ぬことを求める理由は、けっして、この世界が嫌だからでも、つらいから

でもありません。もちろん、つらいことはたくさんあったでしょうし、そもそも、この時パウロは牢獄にとらえられていたのですからつらくないわけがありません。

死を願う理由と恥の意味

しかし大切なことは、死を望ましいという場合のパウロの思いです。今自分が置かれている状況、ただ、福音を宣べ伝えたただけなのに、一部の人たちから憎まれ、ののしられ、暴力さえ受け、ついにはとらえられて裁判を受けなければならず、場合によっては死を覚悟しなければならない、というこの状況がつらいし、将来においても、どうせまた面倒に巻き込まれるだろうし、あまり希望を持てずもう面倒くさくなったから、死んで解放されたい、というような否定的な思いによって「死を望む」、という意味合いはこの所にはまったくありません。そうではなくむしろ、パウロにとっては、死んで地上の生涯が終わる、ということは、イエス様とよりはっきりと結ばれること、例えばコリントII3章では、

（完成の時には）顔と顔を合わせてみるようになる（13：12）という言葉がありますけれども、本当にそのようにしてイエス様との完全な豊かなまじわりに入れられるのは地上の生涯が終わった後だから、そしてそちらの状態の方がはるかに幸せだとわかっているから、だから「死を望ましい」と言えるのです。しかし、そこで大切なことは、イエス様と共にあることが一番望ましいと彼が本気で語っているこの事実です。そしてこのことは、実は、このところで語られておりますもう一つの言葉と関係しています。それは、20節にあります「恥をかかず」です。パウロはすでにお話しした通り、この時牢獄にとらえられていました。それ以前にも、多くの人たちの反対の言葉、嘲りの言葉、逮捕とむち打ちを経験していました。ですから、この場合の恥とは、そのような意味で、この世において恥と思われることを味わいたくない、という意味ではまったくありません。そうではなくパウロにとっては、イエス様から離れてしまうこと、信仰を失うことが最大の恥なのです。

パウロの迷い—どちらがいいかわからない

そして、そのようなことにならず、むしろ、自分を通して、多くの人によってキリストが公然とあがめられるようになること、それを、切に願う希望する、と20節の後半で書いています。このような地上での願いもまたとても魅力的なので、パウロは、死ぬことと、地上にとどまることと、どちらがいいか本当にわからない、と言うのです。そのうえで、地上にとどまる理由を語りますのが22節です。もう一度読んでみます。「けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。」。この場合の「肉」という言葉は、特別に悪い意味はありません。パウロは確かに、他の手紙で例えばローマ書（8：8）では、肉を霊に対立するものとして描くことがあります。けれども、ここでは、パウロの持っている人間としての命全体の意味です。地上における生涯です。そこでもまた、実り多い働きがあることが自分にはわかる、というのです。そして、それは、当然ですが、フィリピの人たちと一緒にあるそのあり方においてだと、24節以下で語っています。そこでパウロがはっきりと言っているのは「必要」ということです。「あなた方のためにもっと必要」という部分です。自分が天に召されてイエス様と共に幸せな新しい状態に入ることよりも、それよりもあなた方のために生きることの方を神様は必要とされている、というのです。

生きるのうれしい

ではパウロがフィリピのキリスト者たちのために働くとは何が起きるのでしょうか。それは、25節にある通りです。「あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらす」。信仰が深まることにおいて喜びがある、というのです。信仰は、一度、信じますとあって終わりではないのです。或いは、信じます、といった時が、最も幸せで、その後だんだん色あせていくものでもないのです。こういうたとえがいいかわかりませんが、それは結婚に似ているかもしれません。結婚は、一時の激しい恋愛感情だけでは、いつか終わってしまうかもしれません。またそのようにして、感覚的に終わった状態をあきらめをもって我慢する、というようなことが世間では、さも当たり前のように言われているようです。しかし、キリスト者における結婚では、激しい熱情が続くかどうかはともかくとしまして、夫婦における信頼、そのような信頼をもとにした愛は、むしろ深まっていくものだと思います。これは私の妻に聞いてみなけ

ればわかりませんが、私はそのように理解しています。同じように、神様、あるいはイエス様と私たちの関係もまた、時間とともに深まっていく、というのです。そこに喜びが増し加わっていく、というのです。

良い働きのため

しかも、それをみんなでやっ行ってパウロは言うのです。「私が再びあなたの方のもとに姿を見せる時」、とあります。実際の所、この段階でパウロが今後の見通しを語ることは、本当はできないのです。裁判の行方がどうなるのか、彼はそれを自由にはできません。それで死を覚悟してさえるのです。けれども、その先に働きがあることを信じているというのです。神様がそれをさせて下さるだろう、というのです。そこに希望をもって、手紙をやり取りしている、連絡を取り合っている、このようなやり取りを通してきっと神さまは働いてくださるだろうし、きっともう一度、会うことができるはずである。そのような見通しをもとに、パウロは再訪問において起きるであろうことを語っています。

二つのことが前進する

それは、26節にあります「キリスト・イエスに結ばれているというあなた方の誇りは、私ゆえに増し加わる」とあることです。パウロと共に語り合うことにおいて、フィリピの人たちのイエス様との結びつきがより深く、強くなっていくだろう、というのです。そのようにして、パウロがそうであるように、イエス様との結びつきをこそ求めて生きる、そのような生き方そのものが、もっと身についていくだろう、と期待しているのです。そして、それは同時に、最初にお話ししたように、19節で触れられていたように、パウロの救いをより確かにもしていくのです。みんなで一緒に、イエス様との深いまじわりを求めていくときに、救いはより完成へと近づいていく、というのです。

誇りをもって生きる

そのようにして、キリスト者の関心が、それは、私たちの関心でもありますが、イエス様との深いまじわりを持つことへと、深まっていくのなら、そして、死の先にある、イエス様との完全な一致を最終的な目的としてはっきりと見据えていくのなら、その時、私たちの生き方もまた、パウロに見られるような、死や地上における様々なわずらわしさに左右されない自由な生き方、キリスト者としての誇りをもって堂々と生きる、そのような生き方へと変えられていくのではないのでしょうか。

祈り

父なる神様。あなたは私たちを主イエスと結び合わせてくださいました。そして、教会のまじわりを通して、その素晴らしさへと目を開いてくださいますから感謝します。私たちが、互いに励まし合い、豊かなまじわりに生きることができるよう、また、その喜びをさらに深めていくことができますようにお守りください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。